大正10年頃　幌内教授場での薪切り作業と遊び　岩本秀正

『イワケシュ郷土史』からの抜粋

（略）３月ともなって太陽の日差しが暖まると、毎年のことながら部落の各戸から１名あて出役して学校の１年間の薪切り、薪割りをやったものである。何十敷（棚）作ったものか、たくさんの薪がストーブに入る大きさに切り、割られていったものである。

やがて４月も半ばとなり、雪も解けて福寿草が校庭の隅に咲き、春水が校地のあちらこちらを小さな流れを作ってこんこんと湧く頃、私たちは１年から６年まで全校児童がＳ先生（単級で教師は１人のみ）の指導でその薪をきれいに積み上げるのであった。その技術も子どもにしては板につき上手だったものである。

薪積みの副産物である「ニツキ打ち」もよくやったものである。薪切り台になった４本の杭を各々拾ってきては自分の所有とし、これのとがった先を雪の解けた土に投げ打って突き刺す。これに相手がぶつけ突き刺し、倒れたら負けとなって、倒した方が相手の杭を自分のものとする権利を得るわけである。今にして思えば他愛のない遊びであるが、これといった娯楽のない当時の少年たちは熱心にやったものだ。

その頃の遊びというと次のようなものがあった。素朴な自然の中に育つ子どもたちにとってかけがえのない遊びであった。

あやとり、あやつき、まりつき、オンコ、コクワ、マタタビ、ブドウ採り、クルミ打ち、ドングリ出し。（略）

注：岩本氏は大正15年３月、太幌尋常小学校卒業。（福山小学校の前身）

大正４年４月幌内教授場として開校。大正５年、部落一同からの寄付金を募り、福山

・幌内21号　東１線の熱田常吉所有地の寄付を受け３間に４間の柾屋を新築、７月から授業開始。

大正15年３月１日、太茶苗尋常小学校と幌内教授場を合併し、太幌尋常小学校として旧福山小学校の位置に創立。